郷土はんのう

第34号

飯能河原町の山車（飯能市有形民俗文化財）

平成13年に飯能市指定有形民俗文化財に登録された山車は各所の破損修復を実施。3月23日公開報告会が行われました。明治30年に建造された「江戸型人形山車」はすでに100年余の歴史をもつ貴重な庶民の遺産です。

二重鮮黄二重黒高欄、彫刻付欄干隣手目の4つの車式作立ての高さは5.2メートル人形は荒武者素戔嗚尊（すさのおのみこと）で大岐大蛇（やまたのおろち）退治の神話から表現された調練業が配されています。飯能まつりにも毎年参加しています。

目　次

◆大光寺の庄宮蔵菩薩坐像……坂口和子 2
◆高麗横丁とおすわさま……清水澄一 2
◆児玉郡美里町と周辺の史跡巡り……関根清志 4
◆絶名に残るタタラ場の痕跡……戸谷克己 6
◆名山秩父　歌碑建立……大野洋弘 8
◆編集後記……坂口和子 8

川寺大光寺　木造虚空蔵菩薩坐像紹介

坂口和子

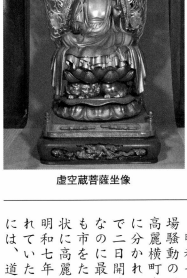
昔から『川寺の虚空蔵さま』といわれて親しまれ、篤い信仰に守られてきた大光寺虚空蔵堂のご本尊虚空蔵菩薩坐像は平成23年飯能市有形文化財に指定されております。ご開扉は12年ごとの丑の年、4月13日のみという秘仏です。毎年4月13日10月13日が例大祭で大光寺は参詣大変美しい尊像をご紹介させていただきましょう。

・虚空蔵菩薩（こくぞうぼさつ）

虚空とは大空を意味します。無量の知恵と慈悲が広大無辺の大空のように衆生（人々）の願いを叶えてくださる仏さまといわれています。民間信仰では"十三まいり"という習慣があり、こどもが13歳になると頭がよくなるようにという願いから虚空蔵参りをするところが各地にあります。また虚空蔵さまの信者は"うなぎ"を終生食べないといわれます。これは虚空蔵菩薩は鳥獣虫魚などに身を変えて種々の利益を与えると信じられ、うなぎは菩薩のおつかいと考えられたからかもしれません。

・法衣垂下の虚空蔵菩薩坐像

製作年代は南北朝時代（14世紀後半）と考えられています。瑞麗で優美な尊顔は玉眼で、台座は水晶が嵌入されています。ふっくらとした童感の全身は金泥で彩色され、それを被う着衣の肩から裳裾へと流れるなめらかな襞が、それぞれ色まれ、それを被う着衣の肩きは絹の衣を思わせます。鎌倉時代後半から南北朝・室町時代にかけて関東地方に多く流行した後期宗風様式でことに衣の裾を台座下に長く垂らした表現形式は「法衣垂下像」と呼ばれる特徴的な造像です。



虚空蔵菩薩坐像

（写真提供）飯能市教育委員会

飯能市域には吾野法光寺地蔵菩薩坐像、白子長念寺聖観音菩薩坐像赤沢金錫寺宝冠釈迦如来坐像などが代表例として知られておりますが、ほぼ同じ頃に鎌倉地域で活躍した同一系統の仏師の手になるものと考えられています。600余年の歳月を少しも感じさせない優美な尊像は当市の宝でありましょう。

高麗横町とおすわさま

清水澄一

昔から歴史のある、旧飯能のなかで一番早くさびれた商店街の高麗横町の原点の諏訪八幡神社（おすわさま）について、子供の頃より近所の年寄りや、一言多い年上の人や年寄りのおじさんや父から聞いた話しを思い出しながらお話します。

○高麗横町

飯能の東西に延びる道に向い合って、昔飯能村・久下分村が一つの宿場をなして、その中程に北へ向う道路が、高麗横町と言われている。「旧　東京大宮道」東京から秩父大宮までの道路の一部分である。

○高麗横町はいつごろから言われていたか

明和七年（1770）飯能の市場騒動の岡役所への訴状に市日は高麗横町を境として、上組・下組に分かれて上組で二日間き、下組で二日間くらの古来より市町になのに最近は下組は上組の市日にも市をたてるので…明和七年の訴状に高麗横町と記されているので明和七年以前より高麗横町と言われていたと考えられる。江戸中期には、道路西側は飯能村字町並・字内出の道路沿いに住居者が点在し店を開いていた、字後口堀（第一小学校東側）は聖天林で住居者はおらず、道路沿いに明治5～6年頃から人が住み住居者が店を始めた。道路沿いに字樽ケ谷戸で畑だけで雨が降ると沼地になり住居者が、明治の初頃から東側は字後口堀、字後口塚

○高麗横町は、丁ではなく町と昔から記されていた。

高麗横町の道の左右の住人は昭和41年7月1日実施の住居表示（町名変更）までは、明治以前から高麗横町の何々と町を書いていた。高麗横町の区間（延長）約500m、大通りの中程のT字路（現仲町信号）から北へ向って（第一小裏信号）の先の鶴舞地蔵の間が昔から通称高麗横町の区間である。

○諏訪八幡神社（おすわさま）

飯能村（本郷地区を除く）・久下分村の鎮守様として江戸時代から現在まで、私たちの祖先から代々おすわさまに奉仕するとともに祭祀を行って御守りしている。

本神社の境内は約6000㎡（約1800坪）拝殿・本殿をはじめ恵比寿神社・丹生神社・末社を祀る。その他社務所・手水舎・神楽殿などを備える神社であり、また獅子舞も江戸中期より継承されている。

創建年月日は、はっきりしないが『新編武蔵風土記稿』によると正13年（1516）初春11日諏訪明神を勧請した場所は大泉寺跡（現在の山手町天理教会の中武分教会敷地）であったと言われている。その後天正12年（1584）4月諏訪明神を再興し八幡菩薩を合祀し、神社にふさわしい現在地（字諏訪前）に祀った。その後安永5年（1776）3月火災にあったと言われているが、氏子によって再建され、私たちの先祖が相続して祭祀を行ってきた。明治5年（1872）5月には神社を国家の宗祀とする方針により村社に列せられた。神事は国による大変重要な行事となり、明治40年（1907）4月に南向きにあったのを、現在地に奉還し東向きに建替えた。その後名栗街道が開削されて参道が分断されたので、大正15年（1926）9月鳥居・石灯籠を現在地へ移し石段・敷石を改修し、協力された氏子の名入りの玉垣で境内の整備を行った。昭和20年8月に敗戦になると官制的社格（村社）は廃止され、その後昭和27年（1952）9月宗教法人・諏訪八幡神社として神社本庁より承認され、昭和29年（1954）9月宗教法人・諏訪八幡神社として法人登記し現在に至っている。

・維持・管理・運営（明治15年五か町の取決め）・五か町より選出の総代・世話人により行う・任期3年とする再任可。

・維持費等は五か町で負担する、その他は別途協議する。

・総代各町より1名　計5名・世話人は15名とする。

・維持・管理・運営は現在も五か町で継承している。

○獅子舞

江戸中期より継承されている。昔から神社の9月27日の秋例大祭に奉納され、前日26日には五ヶ町を巡り各町の会所や辻で獅子舞を行い、27日は朝から神社で獅子舞を奉納していた。現在は11月の飯能まつりにて行っている。

なお、獅子舞の継承は昔は長男のみであったが、現在は制限はない。

○飯能諏訪八幡神社の獅子舞

（一人立ち三匹獅子・棒術・笹々良・他）

（平成20年3月28日　飯能市指定　無形民俗文化財）

・神社の祭礼（現在）

・春　祈年祭

4月第4日曜日

・秋　例大祭

9月第4日曜日

・飯能まつり

11月第1日曜日

（獅子舞行う）

・恵比寿祭

11月第4日曜日

・月次祭

12月第3日曜日

・元旦祭

1月1日

・月次祭

3月第1日曜日

その他の対応

正月初詣・七福神巡り・初宮詣で・七五三詣で・安全祈願・御朱印帳記入・御守、御札の販売

戦時中に中断していた祭りは、昭和21年（1946）9月26・27日復興祭で獅子舞・山車が復活した。昭和46年（1971）11月2・3日飯能市主催の統一「まつり」に獅子舞・山車も統合された。

なお、平成28年9月（2016）創建500年祭を行う予定である。

（清水）

飯能諏訪八幡神社

児玉郡美里町と周辺の史跡巡り

関根貴志

平成25年の見学会は8月23日(金)に行われ、県北の児玉地方の美里町と本庄市を巡った。参加者19名。

講師は田中憬氏。マイクロバスに乗り、7時30分に飯能駅南口を出発。関越自動車道で花園IC で降り国道140号から254号線に入って最初の見学場所である美里町に向かった。案内を務めてくださったのは日本石仏協会の田中憬氏。田中さんは本日初めに訪れる美里町猪俣の普門寺の入り口で待っていてくださった。

①普門寺四十九院塔

県北には飯能周辺では見ることのできない石仏が多くあり、特に珍しいのは弥勒兜率天信仰に根差した四十九院石仏である。

まず四十九院とは何かということについて触れておく。未来仏である弥勒菩薩は現在のところ兜率天で修行しており、遠い将来に下生成仏することになっているのだが、この兜率天には七宝の宮殿があり、内外の二院がある。外院は諸天衆の、内院は弥勒菩薩の住処である。内院の四方にはそれぞれ十二宮あり、中央の弥勒説法院(大摩尼宝殿)を加えて四十九院となる。弥勒菩薩はここで修行あるいは説法しながら下生成仏する時を待っているとされる。

この弥勒菩薩のおわす兜率天に、死者が往生することを願って作られた葬送施設が四十九院である。埋葬地あるいは墓標を四十九本の塔婆で囲むというのが基本的な形式であり、埋葬地に木製の家型をかぶせた例も多いようである。有力者の物となると、石廟を四十九本の石柱で囲んだものとなる。石柱にはそれぞれの院を表す梵字が刻まれている。これは高野山の大名墓地などによく見られるものである。

そして北関東地域に多く見られるのが石造の四十九院である。石廟を簡略化したものようで、墓石を石殿とし、その壁に四十九本の塔婆を刻んだもの。これはこの後に向かった成身院の墓地にも多く現存している。

普門寺　四十九院塔

さて、この普門寺にある四十九院石仏は、この地方特有の石殿四十九院ではなく、四十九院に囲まれた諸仏を石像として建立したものである。他の例としては栃木県足利市の行道山浄因寺にもう一例があるぐらいらしい。この四十九院石仏は元文四年(1739)に、檀徒によって先祖供養のために寄進したものと言われている。ここで、四十九体の石仏が一列に並んでいる。かつては奥の竹藪、今では墓地になっているところにあったという。

石仏の後背には院名と尊名が刻まれている。石仏としては相当珍しい作例も含まれている。

ただし、石仏は一番の院から順に並んではいない。置かれた場所が変わる前は順番通りだったのかもしれない。

②美里町猪俣

猪俣地区は、夏に行われる「猪俣の百八燈祭」が有名だが、この祭りはもともと猪俣党の棟梁である猪俣小平六範綱とその一族の供養のために慶長年間に始まったものである。範綱は源義朝・頼朝に仕え、一ノ谷の戦いで平盛俊を討ったことで有名である。

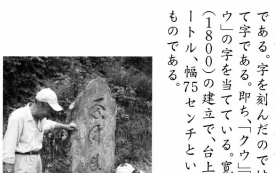
猪俣党は武蔵七党のひとつであり、もともとは多摩郡の横山党から分かれたものである。ちなみに猪俣党の一族には岡部六弥太忠澄がおり、飯能地方との関わりがある。今では猪俣氏は全国に散らばっているが、美里には居ないそうである。未裔が徳川家に仕えて旗本になった。田中先生が子供のころは盆行事に子孫が来ていたと話されていた。

また旧猪俣村には中島利兵衛という名主が居て、平賀源内の秩父中津川の鉱山事業に協力した。源内は当地に数年間滞在していたらしい。結局事業は失敗し、二千両も出資した中島家は家が傾いたそうである。

③梵字庚申塔

普門寺を出て、国道254号線を児玉方面に向かい、湯本地区に入る。ちなみに湯本の「ゆ」は紐の「ゆう」が、「ゆう」になったもので、温泉が出たものではない。

ここには珍しい庚申塔がある。これが珍しいのは、「こうしんとう」の表記を梵字で当てているところである。字を刻んだのではなく、当て字である。即ち、「クウ」「シイ」「トウ」の字を当てている。寛政十二年(1800)の建立で、台上155メートル、幅75センチという大きいものである。



梵字庚申塔

④**美里町「遺跡の森館」**

美里町は、古代の条里制の遺跡が遺っていることでも有名だが、それほど古くから栄えてきた地域である。中世の中丸先生くん「どこを掘っても遺跡が出る」とのことである。古墳は数百もあり、前方後円墳もあるがほとんどは円墳だという。

町の「遺跡の森館」では旧石器時代から室町時代までの多くの出土品資料を見学でき、遠い昔に思いを馳せることができる。中でも広本入宿遺跡から出土した五色の小型宝塔は珍しかった。ただし実物は「県に持っていかれた」とのことで、レプリカが多い。

⑤**瓶麓神社**

次の目的地へ向かう途中、瓶麓（みか）神社の前を通った。

ここは式内社であり、相当に古い歴史を持つ「みか」とは酒を造るために使う大きな甕（かめ）のことだというが、かつてはどぶろくを作って奉納し、また氏子に配っていたという。

⑥**成身院**（じょうしんいん）**（ささえ堂）**

美里町を後にして旧児玉町「現本庄市」の成身院に向かう。ここは通称ささえ堂という変った建築である。

成身院は室町時代の創建であり江戸期には幕府の朱印状を受け、児玉郡、上野方面から秩父・百観音巡りの末寺を擁する一大道場だった。

ささえ堂

後述する観音堂の中には、往職が使用を許されていたという駕籠も保存されている。これは駕籠での移動を許されていたということであり、当寺の格の高さを示している。

しかし明治の廃仏毀釈の影響でいまは無住となってしまった。

ここには先に言及した、石造の四十九院が多く現存している。飯能周辺では見ることのできない珍しい様式であった。

四十九院墓塔

⑦**百体観音堂**

天明三年（1783）の浅間山の大噴火は甚大な被害をもたらした。現在の坂東大橋付近にも溶岩流や土砂とともに、多くの犠牲者が流れ着いた。今でもこの辺りには溶岩流の固まった黒岩が残っている。成身院の元真上人は犠牲者の供養のため百体観音の造立を発願したが存命中は果せず、弟子の元映上人達が江戸を含め各地を回って勧進を行い、寛政四年（1792）に百体の観音像を鋳造し、寛政七年（1795）に三仏堂を建立して安置した。「三仏」と呼ぶのは、堂の中央に阿弥陀如来・釈迦如来・薬師如来それぞれの坐像を祀っていることによる（これらは15世紀の造像である）。

少しややこしいが、この三仏堂は「三匝堂（さんそうどう）」と呼ばれる様式である。

三匝堂とは江戸後期に見られる仏教建築様式で、堂内は回廊となっており、三十三観音や百観音などが安置され、順路に沿って進むだけで巡礼ができる構造となっている。仏教の礼法である右繞三匝（うにょうさんぞう）に基づいて、右回りに三回匝る（めぐる）ことで参拝できるようになっていることから「さざえ堂」と通称することが多い。安永九年（1780）に江戸の五百羅漢寺に完成したのが最初のものらしく、北斎の富嶽三十六景の題材になるなど人気を博したものらしい。また、現存しているものの中では会津の正宗寺のものが特に有名である。

つまり当時最先端の流行だった建築を採用したことになる。「武蔵風土記稿」には「堂宇の荘厳なることは近郷にまれなり」との記載がある。

当院の三仏堂は外観は二層、中は三層の建物で、一層は秩父三十四観音、二層は坂東三十三観音、三層は西国三十三観音を祀っている。このことから「百体観音堂」とも呼ばれている。またここには日本一と言われる鰐口がある。直径180センチ、厚さ60センチ　重さ750キロである。

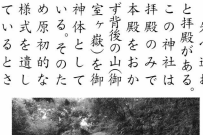
しかし明治になってからは災難が続く。明治21年に失火で観音堂は焼失。観音像はすべて溶けてしまった。再建を期した地元の人たちが資金も労力も提供し、20余年後の明治43年によりやく再建されたものの、安置された観音像は60体だけである。その後大正八年には秋祭りの花火が元で本堂が全焼してしまう。太平洋戦争中は梵鐘の供出などがあり、戦後は約半数の観音像が盗難に遭った。

いま祀られている百体の観音像の多くは、銅像に限らず木彫でも作られている。これらは建物の珍しさや多くの観音像に目を奪われていたが、歴史的背景を思いつつもう一度訪れてみたいと思った。

⑧**金鑽神社**（かなさん）

成身院を出て神川町の金鑽神社に向かった。金鑽神社は延喜式には金佐奈神社と記載されている式内二宮の神社である（ちなみに当社所境内に入って対の右手に国指定重要文化財の多宝塔が立っている。これは丹党の氏族である阿保氏が、天文3年（1534）に建立したもの。3年に一度こけら葺きを葺き替える必要があるという。平成20年の大改修では約2千万円の事業費を使ったとのことである。

先へ進むと拝殿がある。この神社は拝殿のみで本殿をおかず背後の山(御室ヶ嶽)を御神体としている。そのため原初的な様式を遺している。旧官・国幣社の中で本殿がないのはここのみ、全国でも大神神社と諏訪神社だけである。


鏡岩

拝殿の前を通って奥へ進み、やや急い坂をしばらく上っていくと鏡岩がある。これは約9千万年前の断層の地すべりでできたもので国の特別天然記念物に指定されている。田中さんが子供のころは滑り台にして遊んでいたらしく「子供たちの尻で磨かれてよく光っていた」そうである。

今は柵に囲まれ立ち入りできないためか、あちこちに苔がはびこり雲ってしまっている。また、岩を見上げるように不動明王の石仏が置かれている。この山はかつて修験の霊場でもあった。

道脇には石仏が点々と安置されている。もとは100体を数えたらしいが今では80体があるらしい。そのまま登っていくと道が分かれ左へ進むと奥宮へ、右へ進むと御嶽山の山頂へ通じる。

この御嶽山は、拝殿奥のご神体(御室ヶ嶽)ではない。御室ヶ嶽は禁足の地となっている。御嶽山は多宝塔を寄進した阿保氏の山城があったが、甲斐の武田氏に攻め滅ぼされたのであった。ここでは昭和になっても骨が出たという。

奥宮は御嶽山の一峰の岩山山頂にあり、決して楽な道ではないが、登ると護摩壇の跡があり、360度の展望が望める。天気が良ければ赤城などの上州の山並みまで見えると思われるが、空は重く、下山するころには雨が降り始めた。

奥宮

この後、最後の予定地である塩原農園に向かった。ここではブルーベリー摘みを行う予定だったが、折からの雨が次第に強くなってしまったため残念ながら中止となった。

道の駅花園で休憩を取った後、16時半ごろ県道飯能寄居線経由で帰路に就いた。18時、激しい夕立が降るなか無事に飯能に着いた。

古代から中世、さらに近世の遺産に触れることで県内の長い歴史を感じることができ、大変有意義な見学であった。回れなかった場所や見落としたものも多いので、またいつか訪れたいと思う。(関根)

地名に残る タタラ場の痕跡

戸谷克己

名は体を表すというように、地名はその場所の地形や生活や文化等を表している。日本の地名は、青梅や日高や秩父や飯能のように漢字二文字で表されるものがほとんどである。それは、奈良時代に政府の通達で、「国の地名の表記法に倣って命名されたことによる。ただ、発音に漢字の音を当てたため、日本の古代語では「出っ張っている」という意味の「いづる(半島)」や「えつ(岬)」に、伊豆や江戸という字を当てたので、漢字音からでは全くわからないものになってしまっている。だから、使用されている漢字の意味によって地名を読み解いてしまうと、その意味や由来を誤って解釈してしまうことになる。

私は一昨年の春に、飯能市原市場の房ケ谷戸に転居してきたのであるが、家の近くのバス停はあまり聞き慣れない「赤工(あかだくみ)」という名称であった。「赤工」の「赤」は鉄のことを、「工」はそれを精錬して鉄製品を製作する「鍛冶師」のことを意味している。それは、この近辺で製鉄や鍛冶の仕事がなされる場があったということを示している。そのことに関連するかのように、転居する直前に鍛冶の地図を見ていた時に、阿須や加治や笠縫といった製鉄に関連する地名が幾つも出ていたということに気付いたことを思い出した。(西武池袋線の「飯能」駅の隣は「元加治」という駅であった。)私は以前から民俗学に興味を持っていて、そのことから地名に対しても深い関心を抱いていた。「阿須」とは古代語で砂鉄(アス、アソ、アサ)のことを、「加治」はまさに鍛冶=タタラ場のある所を、「笠縫」は古代の物部氏に属する曲部(かさべ)の一部で鍛冶にも関わりのある集団の名前を示す地名であった。

因みに「飯能」という地名は飯能の隣りに高句麗の入植者により開発された「高麗」郷があるところから、朝鮮語の「一」を表すは「大」を表す「ハン」と国を表す「ナラ」との合成語である「ハンナラ」=「ハンノウ」という説と、古代に飯能を開発した秦氏の「秦」に木偏を付けた「榛野(ハルノ=ハンノ)」となり、「能(ノ)」が当てられ、それが音読みされて「飯能」になったと、また秦氏の集団は職人や芸能者として活躍し、鍛冶や鋳物の職人も数排出し、鍛冶や職人や芸能者を表す「能」が「棒」に付いて「棒能(ハタノウ)」になり、それが音読みされて「棒能=飯能」になっ

たという説があるが、私としては後者の秦氏に関連して飯能になったという説を支持したいと思う。

「赤工」というバス停の名称から連想したように、名栗（入間）川を挟んだ対岸にはタタラ場があった。「金山」、「金生」（カナウミ）が語形変化したと思われる「叶（カノウ）」神社があった。また、神社の参道の入口辺りの名栗川が大きく蛇行する場所が「聖天淵」と呼ばれており、そう呼ばれるようになったのは、その淵に臨んで立っている巨岩の上に聖天様を祀った祠があったからだという。その祠に祀ってあった聖天様の像は、大洪水で一度祠ごと流されて、その後その近辺の砂の中から発見され、今では「歓喜天」という烏頭が慈けられた叶神社の祠に祀ってある。

九月三十日の例大祭の閒帳の折に、5センチほどの鉄を鍛造したものと思われる小さな像と40センチほどの木彫の聖天様を見る機会を得た。聖天様＝歓喜天とは元はヒンズー教の神で後には仏教の守護神となったガネイシャと呼ばれる象頭人身の形をした単身と双身の仏像なのであるが、双身のものは男女和合の姿をしていて、叶神社に祀ってあったものはまさにそれであった。ただ、小さな像は象頭人身ではなく、平安時代の貴族階級のような長い髪をすべらかした女性と烏帽子を被った男性が交合している、歓喜仏としては珍しい特異な形をした像であった。タタラ場をホトやフネといった性的な名称で呼んでいるように、古代人は生殖と金属の生成を同一視していたのに、金属の精錬に関わる人達はその象徴としても歓喜天を祀るようになっていったのであろう。これらの「金山」や「叶」や「聖天淵」といった地名は、まさにここにタタラ場があったという事実を確実に物語っているのである。その他に も祠の階段の下には、「聖皇太子」と刻んだ男根の形をし、その中央には陰部のような窪みを持った石碑が立っていた。聖皇太子とは聖徳太子のことで、聖徳太子は職人の神であったので、この石碑からも確実にここに「赤工」がいたことを物語っているのである。

この地が隆盛を誇ったのは、隣の房ケ谷戸に南朝の亀山天皇の最初が正元二（1260）年で、最後が正和四（1315）年であることから武士が政治権力を握った平安末期から鎌倉・室町時代にかけてであったということを推測出来るであろう。この地は、武蔵七党と言われる関東武士団の重要な代官所の給地であったと思われる。武蔵七党の内、丹（丹治）党や村山党は製鉄や精錬の技術に長けており、加治丘陵には丹党の加治氏や村山党の金子氏がいて、そのような人達の関係者が、この「金山」の地でタタラ場を営んでいたのではないだろうか。「砂鉄七里の炭三里」という諺通り、阿須山近辺の良質な砂鉄とこの周辺の炭を使い、タタラ場に必要な強い風や豊富な水に恵まれていたのである。「金山」の地で刀を初めとする様々な武具を製作していたのであろう。

それには、例大祭の折に氏子の方から、かつては「金山」の人達が講を組んで榛名山や武蔵御嶽山に出掛けていたという話を聞いた。後で調べてみると、榛名山は迦具土（カグツチ）命を御嶽山は大巳貴（オホナムチ）命と櫛真智（クシマチ）命を祭神とする神社があった。迦具土は産鉄や精錬の神である金山彦と金山姫に関連する火の神で、大巳貴は砂鉄と製鉄の地である出雲の神、櫛真智命はその祖神が金屋子神＝天目一箇（アメノマヒトツノ）神であり、これらの神は皆鍛冶に関連する神様であった。これらのことからも、この「金山」の地が、鍛冶と密接な繋がりがあったということが分かるのである。

この「金山」の地から入間（名栗）川沿いに2キロほど遡った所にある「赤沢」という集落の星宮神社に奉納されている絵馬を挙げたいと思う。この絵馬には、緋の袴をはき長い黒髪を振り乱して大鎚を振り下ろそうとする女性と、烏帽子を被り片手で金鉄で刀身を鍛えようと小鎚を振り上げる男性の姿が描かれている。そして、この男性の片方の眼は潰れている形で描かれている。この男性と女性は、鍛冶の神の金山彦と金山姫のことを描いたものであろう。

さきにこの「赤沢」＝「金山」周辺にタタラ場があり、そこで盛んに製鉄が行われていたという事実を雄弁に物語っている。（戸谷）

（写真提供）飯能市郷土館

若山牧水歌碑建立

平成25年11月16日、原市場白髭神社境内に牧水の歌碑が建立除幕されました。

国民的歌人牧水は、大正6年、8年、9年と、名果川沿いを訪ねて、この地で百首以上の歌を残しています。

大正6年11月16日は、白髭神社脇にある「かめや」に一泊しており、この11月16日にあわせて除幕されました。

「石こゆる
水のまろみを眺めつつ
こころかなしも秋の渓間に」

この地で詠まれた一首で、牧水自筆の歌が刻まれました。当日は、牧水生誕地の宮崎県日向市の方々、牧水の今孫榎本笠子氏、飯能市長をはじめ、文化関係の来賓により盛大に除幕式が開催され、飯能市では、三基目の牧水の歌碑誕生となりました。

大野邦弘

飯能郷土史研究会の活動

◎平成二十五年度事業報告

▽総会

・四月二十日(土)

講演会

「飯能の天文暦学と和算家」
―千葉歳胤と石井和儀―

講師　山口正義氏
(郷土史研究家・羽村市在住)

▽例会

・六月二十二日(土)

「高麗横手と諏訪神社」

講師　清水澄一氏
(郷土史研究会理事)

・八月二十三日(金)

県内研修会

「児玉郡美里町と周辺の史跡巡り」

田中愷氏
(美里町前教育委員長、日本石仏協会理事)

・十月

特展「飯能の災害史」

郷土館事業に協賛

・十二月十四日(土)

「飯能の地名から見たタタラ場の痕跡」

講師　戸谷克己氏
(詩人・評論家)

・平成二十六年二月十五日(土)

「狭山茶の歴史と試飲」

講師　内野博司氏
(郷土史研究会副会長)

※大雪のため中止

・三月三十一日

郷土はんのう三十四号発行

◎平成二十六年度事業計画

▽総会

・四月十九日(土)

講演会「江戸時代・飯能市域の領主と村むら」

講師　尾崎泰弘氏
(飯能市郷土館学芸員)

▽例会

・六月二十一日(土)

「狭山茶の歴史と試飲」

講師　内野博司氏
(郷土史研究会副会長)

・八月二十三日(金)

「飯能四方山話」

講師　浅見賢治氏
(郷土史研究会理事)

・十月十七日

県外研修・榛名神社周辺の史跡巡り

・十月

特展「機屋(はた)の挑戦」郷土館事業に協賛

・十一月十三日(土)

「武蔵武士はなぜ天下を取れなかったか」

講師　西村義司氏
(郷土史研究会会員)

・二月二十一日(土)

「太田道灌と山吹の里伝説」

講師　井上晃氏
(郷土史研究会理事)

・三月三十一日

郷土はんのう三十五号発行

〈新会員〉

戸谷克己(飯能市原市場)

編集後記

厳しい寒さと大雪にみまわれた平成26年の冬、待ちどおしかった春は梅の開花とともにやってきました。例年とかわりなくすこやかに咲き競う花々を目にすると、自然とともに生かされている有難さを思います。

郷土はんのう34号は6月定例会でお話いただいた清水澄一氏、県内研修会の報告記は事務局担当の関根貴志氏、12月定例会の戸谷克己氏に執筆して頂きました。文化財関係のご報告として、川寺大光寺のご本尊木造虚空蔵菩薩をご紹介いたしました。表紙は昨年の飯能二丁目の山車に続いて修復なった河原町の山車を掲載。31号で原町の山車とこの3点が飯能市の民俗文化財に指定されております。25年11月に原市場白髭神社境内に「若山牧水歌碑」が建立され、大野邦弘氏が紹介されています。

皆さま郷土の情報をぜひ、おきかせください。

(坂口和子)

郷土はんのう　第三十四号
発行日　平成二十六年三月三十一日
発行所　飯能郷土史研究会
〒357-0034 埼玉県飯能市東町三―一六
大野邦弘　電話九七三―三三八一
題字　(堀越方)
印刷所　(有)ビイ・ユースフル